

Title	九州大学附属図書館蔵『落嘶ふし見酒』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 俊一郎(Ishikawa, Shunichirou)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.10 (1988. 12) ,p.66- 72
JaLC DOI	10.14991/002.19881200-0066
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19881200-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔資料紹介〕

九州大学附
属図書館蔵 『落
ふし見酒』 解題・翻刻

石川俊一郎

解題

今回翻刻する『落ふし見酒』は『国書総目録』に拠れば、九州大学に一本所蔵されるのみである。伝本も少なく、また断本基礎文献作業の現時点での到達点である『断本大系』にも未収録であるので、今回九州大学附属図書館の御許可（九大相第10号）を載いて紹介・翻刻することにした。
まず本書の書誌を記す。

表紙 改装。砥粉色後補表紙。堅一五・九、横一一・三。種。
題簽 ナン。

内題・序題・尾題 ナン。
刊記 最終丁奥付に「此はなし古くは掃せ板元へ門松竹の音のあるうち」という歌のあとに、

寛政三辛亥のとし
江戸本芝三丁目
清水治兵衛板とあり。

丁数 三二丁半（内、序一丁、本文三〇丁、奥付半丁）。
丁付 序は丁付ナン。卷ノ廿八、廿九ノ三十、三十一終。

行数字数 每半葉六行。毎行約一三字。漢字平仮名交り。間々振仮名あり。

匡郭 無辺無界。字高約一一・九種。

柱刻 上部に「ふしみ」、下部に丁付のみ。

挿画 四ウ・五オ、十八ウ・十九オ、見開き二図。

話数 一九。

備考 序末に「寛政三辛亥初春 浦邊の斗石保」と序年・署名あり。奥付半丁は卷末にある以外に、四丁と五丁の間にも誤綴されている。

『割印帳』の寛政二戌年十二月廿日割印の項に、

落ふし見酒小本 全一冊
寛政三亥春 墨付卅二丁

寛政三亥春

浦邊の斗石述

板元売出 清水治兵衛

との記載がある。そして本書は、断本研究の先駆者である宮尾しげを氏の「中期断本の調べ(後)〔寛政年間〕承前」〔小咄研究〕第十一

号)に、

富士見酒 一 寛政三年

浦邊斗石作

浦邊斗石は道邊斗石の誤りで、松山の斗石のことである。

と紹介される。その後は同氏の『定本笑話本書目年表(二)』にも同じ記載がある。『割印帳』を振り返ってみると、その作者は明らかに浦辺の斗石とある。また本書序末の署名にも浦邊の斗石と刻されており、「道邊の斗石の誤り」と謂われる宮尾氏の論拠は、今一つ判然としない。(これについては後述する)。

『国書総目録』には、浦辺の斗石の名で本書が挙げられているだけで、道辺の斗石の項目はない。また天保末年の俳諧師に斗石なる者がいるが、本書の作者とは考えられまい。では、宮尾氏の謂われる松山の斗石とはいかなる人物であろうか。『国書総目録』に拠れば、その著作は四点。東大教養学部蔵の『八百屋恋のしら玉』は松山堂斗石の名で、天明四年に同じく清水治兵衛方より出ている。国会の『祭文ぶし正本』は実は『恋のしら玉』の仮外題で、全くの同板である。残る二点はいずれも断本で、安永九年刊の『笑ひぞめ』と寛政五年刊の『恵方みやげ』である。『笑ひぞめ』は安田文庫に旧蔵されていたもので、焼失したと謂われる。(なお尾崎久弥コレクションにも所蔵されている、とあるが、これは全くの別本の影写本である。)同書については、「中期断本の調べ三」(『小咄研究』第四号)に、

序一丁、本文十七丁、年忘れ——けだものや迄十話。松山の斗石こと、道邊高保の落款が、寛政三年「恵方みやげ」にもある。とある。更に「恵方みやげ」は、宮尾氏の編になる『寛政笑話集』

(昭14、小咄頒布会)に翻刻・一部複製がある。それによれば、序

末の署名に「松山の斗石邊道」と記され、奥付は本書『ふし見酒』と全く同趣向で「此はなし古くは掃せ版元へ門松竹の音のあるうち」の歌と「寛政五うし」とし、江戸本芝三丁目清水治兵衛板」という刊記である。同趣向、同じ板元であることも考慮に入れば、高保という名を媒にして浦辺の斗石と松山の斗石が同一人物である、ということとは確かなこととなるだろう。恐らくは宮尾氏の「浦邊斗石は道邊斗石の誤り」との言は、『恵方みやげ』の邊道の印記が根拠となつていたのであるが、しかし『ふし見酒』に明らかに浦辺とある事実、『ふし見酒』の方が二年も出版が早いことを考え合わせれば、短絡的に「誤り」と決めつけて良いものであろうか、存疑のある点である。

次に書肆清水治兵衛について考える。井上隆明氏『近世書林板元總覧』(昭56、青雲堂書店)に拠れば、清水治兵衛は芝神明前三島町に店を構え、安永七年から寛政一年にかけて活動していたことがわかり、他に「天明に常陸祭文類刊。他に新内本多し。」との由である。国学院高校藤田小林文庫蔵の合本『新内集』には『比翼の初旅』『仇比恋浮橋』『恋衣对白むく』をはじめとして十六点、東大教養学部にも『明烏夢泡雪』『浮名初紋日』等十一点にもほる清水板の新内本がある。就中、『藤蔓恋の柵』には「浜の斗石述」なる記載もある。これもまた浦辺の斗石の別名だとすれば、斗石と清水の関わりが一層強いものであることの証拠となる。

ところが、前掲の『八百屋恋のしら玉』の奥付を見ると

天明四年甲辰初春合校作者 松山堂斗石

正本所 江戸本芝三丁目 清水治兵衛保高

とある。これによれば、書肆清水治兵衛自身の名が高保、というこ

とにならう。されば作者松山堂斗石（≡浦辺斗石）とは、即ち書肆清水治兵衛の筆名にほかならない。そのように考えれば二者の深い繋りの謎が解け、斗石の人物像がおぼろげながら浮かび上がって来よう、というものである。

今一度『割印帳』に立ち戻る。清水屋治兵衛の名が見える書を探ってみると、本書の他には寛政五年の書道の書『書字立教』、寛政九年の将棋の書『象戯楸梯抄拔萃』、寛政一一年の将棋の書『将棋盤面図』だけである。これが清水の全出版物ではあるまいし、数多く出版している新内本、祭文類が全く無い、ということ、出版に際し不慣れたジャンル、係争の起こる可能性のある、例えば本書の如き嘶本等の書物についてだけ願出をしたと考えてはいけないものだろうか。

最後に本書の咄についてみてみたい。当時、安永・天明の咄本の剽窃が多かった中で、本書は奥付の歌に謂うように新作の咄ばかりである。強いて先行話を求めるとするならば、最終話「かごかき」で、籠かきが客にやり込められる、というモチーフを享保一五年刊の『座狂はなし』上之巻第四話「かごかきの二役」に、同話の落ちの「すくにかげおち」を、明和九年刊の『鹿の子餅』第一五話「密椎」の「みちから欠落」に求めることができるか否か、という程度である。

ともかくも本書『ふし見酒』は、新内本・祭文を手がけた書肆兼作者の清水治兵衛≡斗石が、本来の仕事から離れて作った新作の咄本、と見てよさそうである。

注

- 1 樋口秀雄・朝倉治彦校訂『享保以後 江戸出版書目』（昭37、未刊国文資料）に拠った。
- 2 東洋文庫196『江戸小咄集2』（昭46、平凡社）所収
- 3 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムに拠った。

翻刻

〔凡例〕

- 一、翻刻にあたっては、忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものとするよう努力した。その方針は概ね次の通りである。
- 一、本文の行移り丁移りは底本に従わなかった。
- 一、句読点は、読み易さを考え、私に施した。
- 一、仮名の字体は現行の平仮名に改めた。
- 一、仮名遣いは混乱しているが、底本通りとした。

序

目出たや／＼、春の初の咲花なんそ。夢に見てさへよいやと申。其花の宿にふくみたる君の笑顔、誠に若松初日のさすかとし、是は又、人まねをする鸚鵡郭中へ（序オ）入て、時斗の音をしらするといふことの葉をまねて、おとき一坐笑草の落し嘶、鶉のまねするからず、亥のとしの若水をのむとかや。

寛政三辛亥初春

浦邊の斗石 保高（序ウ）

正月

是松兵衛、正月だがなんぞ目出たいはなしはないか。あるともく、夕部な一ふじ二たか三なすびを夢に見た。それはめでたい、いわつしやれ。ヨウサイわふつもりだ。(七オ) まづしんもろはくをかつて、血多ん近付千五百人の余あるから、是を残らずよふつもりだ。そふすれば長者になるといふから、おぬしもきてくれ。ヨウそれは大きなことだ、されば。イナ大きく(七ウ) なくては長者にはなられまい。まづおれがはなしをきかつしやれ、此やうなことかむかし、あつたとき。

かいぞめ

初右衛門ばくろうの所へ行、御ていしゆ(二オ) 内にか、一寸御目にかゝりたい。幸まなんて御ざります。初御そうだん申たい儀は、旦那の御のりぞめの御馬が入用たか、毛^けなみのよいすなをなのがあらふか。幸ましくけなみもよし、心もよし、(二ウ) 何れまいり候ても御氣に入ります。誠に名馬で御ざります。請合て上ケましやう。しかしながら、なじんでまいりますと少し申ぶんが御ざります。旦那をのせましてあたゝかになり、こゝろ(三オ) もちがよくなれば、へつびりをいたします。

かごかき

是かゝアどのきかつしやれ、けふて五日六日あすびだ。此よふにひまになつては、やすひ米のめしが(三ウ) くわれ、けふもない。こまつたもんだ。女房ひまならよふ御ざります。あすからめしがくわすば、酒でものんでいましやう。

かはらけ

是、さんよ、正月の内は物のかけ(四オ)(四ウ・五オ挿画) たの、

落たの、われた、ちるのといふ事はならぬから、そふおぼへていやれよ。お久米にもそのとふりをいゝ付ておくから。さんかしこまりました。ほとなく、げんくわんたのみませう。関^{せま}兵衛で(五ウ) 御ざります。年頭の御しうぎ申入ります。女房是へ御とうり被成まし、と座敷へとうす。はやくと御入来、相かわらす御たがひに御目出たふ御ざります。是さんよ、御栄よ、おくめにおさかつきをもつて(六オ) きやといやれ、かわらけも出しやれと、いや、娘くいつみに三組のさかつきを出す。女房是かわらけをはやくたしやらぬか。娘女中よろくとたがひに顔をにらみくらをしている。娘さん、おぬしにいゝ付ておいた(六ウ) からはやくたしやれな。さん私のは正月の内はだされませぬ。おくめさんのがよふ御ざりませう。女房なせに。さんわたくしのはわれております。

たからふね

若者四五人あつまりて、ことしは(七オ) 福引もなるまいし、たからふねでもうらふではあるまいか。しかしあれは一日二日斗で、あともつまらず。そして残つたらとふしよふ。八兵衛はて残つたら、二日のばんにあくふけぞうといつ所に西の海へささりく。(七ウ)

いざり

是八兵衛、久しいな。此比はきついひまたが、おぬしはどふだ。どこでもおなじ事さ。なんぞ錢もふけの口があらばたのむよ。九兵衛ヲ、よい錢もふけの思ひ付が(八オ) あるが、そうだんにのらぬか。八兵衛ヲ、なんなりと錢にさへならば、相手にならふ。此せつものきた。そんならおぬし、いざりのまねができよふか。できるとも。そんならおれがざるをもつて口上をいふて(八ウ) 錢をあつめるから、おぬしいざれ。それはよかるふ。思ひ付だ、あすから出よ

ふ。夜のあけるをまちかねて、新きいさりてなんぎいたします、おとふりの御だんな様がた、おたすけなされ下されまし、とよび(九オ)立る。ひとりはいぎる。もはや七ツ時ぶんになり、もらいための銭おもくなると、人の見ぬ間に、是八兵衛、あまりきがつきたから一っぱいのもでくるから、かならず立まいよ、といふて酒やへ行と、跡で八兵衛仁王立にたつて(九ウ)おふあくびする。九兵衛帰りて、はてじやうのこわい、なぜにたつた。いざりあまりくたびれたから休そくする。

親嘉兵衛子嘉兵衛

親嘉兵衛子嘉兵衛にあり、是嘉兵衛よこ丁にはたんもみちのすいもの(十オ)新見せが出来たが、是から行かふてはないか。子嘉兵衛イヤそのよふなぼたんのもみちのといふはい名のついたものは、つ猪鹿^{しか}たべた事かない。

むすこ (十ウ)

母むすこにいけん。是吉よ、こなたのどふらくゆへに、此比はしよくじもたべられぬ。酒斗りのんてゐる。おれがいけんするうちにしまつてくれ、そふなくてはあすが日に、親父がかんどうする、といふ。もしかんどう(十一オ)しられたら、どこへゆこふと思ふぞ。ハチその時は、女郎かいに行のさ。

せいもん

是万好、手まへはむかふのむすめをなめたな。万公とんだことをいふ。いやくそふいやんな、うそてはない。此間(十一ウ)唐人けんぶつの時、おみよさんか手まへがやつたれば、さじきからいつそのぞいて唐人を見ず、手まへのかけの見へるまては見ていた。それともうそかかくすと、これからつき合はせぬぞよ。万せいもん、な

めはせぬ。そん(十二オ)ならせいもんするか。万するともく。日本六十余州の神く様、唐四百四州の神く様でもかける。手まへまだうそをいふ。日本の神く様さへくわしくしらなひで、どふして唐の神くがしれるものだ。万(十二ウ)そふいやんな、此間りうきう人にくわしくきいておいた。唐のせいもんはなんと書。万書てみしやうか。ウ、見よふ。万書。ちちんぶいくばアく。

猿のもちつき (十三オ)

猿とも寄合、さてけふより合の義は、もちつきのそうだんて御さる。当年はほうねんに付、めでたくもちをつき、御たがひにとりやりを致ましやう、との御そうだんで御さるが、何れもいかゞのおほしめしで(十三ウ)御さります。小猿ともはしめ口をそろへて、其おぼしめしよろしく御ざりましやうとそんします。見ざる、きかざる、ものいはざるまでも、是大悦とそのだん定める。さる廻シ、そのていをきくよりも、これかムアの(十四オ)めてたい事ができた、きかつしやれ。女房どのよふなめてたい事で御さるぞ。ていしあすはのさるのもちつき。

ぢしん

村田はやい御出きん先當日は御目出たう御ざります。軍兵衛御たがいく(十四ウ)扱夜前は大きなぢしん、めづらしい事で御ざりました。角兵衛私は外へ出るひやうし、上り口より落て大きにけがを致しました。軍兵衛私もきいて下され、早く子ともを外へだそふとぞん(十五オ)して、あまりうろたへて、かムアをわすれました。またうろたへた事が御さる。番丁では火見からてんぐが落て、はなをぶつかぎました。(十五ウ)

ゑほう参

是作兵衛どの、此正月はこの内へゆきても、もちと酒かたくさんな。世の中がよくまりました。是からだん／＼なにもかもさがり、くらしかたも(十六オ)いたしよくなりませう。きのふゑほうまいりに行て、小判百両を廿四文でかつてきた。大きにやすくなりました。しよじか此通りにさがるて御ざりましやう。(十六ウ) 友たち手まへはどんな事をいふ。小判百枚は六十メする。それを廿四文や三十二文にうるべらぼうがあるものか。あんまりなたはけなことをいふな、ちつとたしなめ。うゝそのよふにいぢ(十七オ) めるなよ、是はなほうねんのねごとだ。

八つ山

奥州のじゆんれい八つ山を見て、扱爰は山を引うけ、海を見はらし、けいのよいおもしろい(十七ウ) 所て御ざります。此所にくつたなくすむ人は誠にごくらくた、うらやましい。やと引おまへ達ア爰の如来様をおかまつしやつたが。イェまだて御ざる。宿引そんならおがみなさい。ずつ(十八オ)(十八ウ・十九オ挿画)とむかふの奥に見へるが如来様、両わきのがべんでん様、よくおがんでおきなさい。道者ありがたふ御ざります。誠の生如来、是では定佛をいたすて御ざりませふ、となみだをこぼして(十九ウ) おがむ内に、いづくともなく鬼ども罷出、定佛するといふがまだ是ではならぬ。定佛と申者は、万ほうそろうてからの事。まだかけた事がある。道者なにかかけました。(廿オ) 鬼爰にはぢごくがない。

流人

雪ふりに、流人者はなはだくらしかたにこまり、二三日食もくわらず、いかゞせんとしあんじて居る所へ、たのみませふ、と中間がくる。遠(廿ウ) ゑんの所より、暮の餅一かざり、こまめ一袋来ル。

なにも喰ものゝなきしあんの所へ大悦び、あいさつもつ／＼にし、なんぞおうつりを、といゝなから先筆箱に紙を入レとさがす。もとより紙もなし。アゝ(廿一オ) 折わるい、といゝながら附木をさがす。これも又ひとさきもなし。アゝこまつた、といへば、幸主此よふな目出たい時のうつりにはまつ／＼山にふる雪がよひ。(廿一ウ)

むけんのかね

ゑんま王の前へごくそつども罷出、さて親方、此ごろはかまをば、ちんもちにかしてやるし、鉄ほうはしちにおき、商賈をやすんでいてつまらぬもんだが、どふし(廿二オ) たらよふ御ざらふ。ゑんま王又よい事もあらふから、しんぼうをしやれ。ごくそつども其様な先のしれぬ事をまつているよふな、ゆるやかなしい事ではない。いつそしやばへいつて、むけんのかねでもつくべい。(廿二ウ)

子おろし

横丁に子おろしができた。きけばうつくしい者だといふ。いつて見よふと二人で行けば、子おろしのとなりより友だち出る。これ八よ、此子おろしは(廿三オ) どこから来た。そしてうつくしげな、ほんの事か。囚こりや、あの手まへたちもしつていよふ。當麻の中將ひめた。二人ウゝその中將姫といふ、はすの糸とつた人か。囚ウ、その中將姫だ(廿三ウ) から、中條流のくわんそた。そこでたへまからこつちへみせをだした、女いしやの元そよ。二人そんならきみのわるいもんだ。なんぼいつても、あまでは子をうんだ事はあるまいし、しらふ(廿四オ) とだによつてきみがわるい。命にかゝるりやうじ、あぶないもんだ、と高こへのはなし、内からきゝ付て、中將ひめせうじを明て、私だどてまんだらでもねい。(廿四ウ)

大雪

大雪のふる日、ていしゆかゝをよんで、たんすの引だしをおもてへ出して、あの雪をたんとしまつておきやれ。女房おまへはきがちがひなかつたそうな、そん(廿五才)なに雪をしまつておいてどうするへ。ていしゆもふ日がねいは、正月ものゝわた入にする。女房それは思ひ付だか、春の日のあたる所をきて行たら、すそから雨だれが落よふ。ていしゆじよさいが(廿五ウ)あるものか、とい竹をすそまはしにする。

琉球人

通人とかたい武士と、二人つれにて琉球人のちやくを見んと、高輪をさして行。なじみの(廿六才)茶屋へ上る。通人道へもむしやうにしやれ、しほやにてうぬほれをいふ。老人はかたくるしい武士、つり合ぬつれなり。茶屋へ上てむしやうにかなぼうを引来ル。りうきう人くるよふす。(廿六ウ)見せ先へ通人罷出、のび上りへ、ア、きたへ是はとふもいへん、日本だへといへば、武士いやあれが琉きう人で御さる。

かごかき

よいからよんでいれとも、いつ(廿七才)こうにのらふといふ人もなし。つまらぬものとおもふて、四つ過まで立つくす所へ、千鳥あしのなまゑ、どうか、女郎買らしく見へるゆへ、してやつたりと、旦那かごやらふ、と付どものりそふも(廿七ウ)なし。かごかき、おまへはよつて御さるからあぶない。もどりかご、やすいのだ。ひらにのつて御いで、といへば、かの男、おれはかごがきついきらいだ。のるとちきにきしよくかわるくなる。それでこうしてぶらへ(廿八才)宿まで行。かご夫は下手かかくから、そこできしよくが

わるいのだ。おいらかよふな上手のかごにのつて見なさい。ちつともゆれないから、きしよくがわるくはならない。男夫でももしき(廿八ウ)しよくがわるくなつてはわるいからよそふ。かごひらにのりなさい。わるくなつたらこつちから薬代を上ましやう。サアへといふゆへ、そんならとかごにのる。一つさんにかげごへいさきよく(廿九ノ三十才)行と、だんへなまゑいかごにもたれて、きしよくがわるくこみ上ル。男是へ、かごのしゆ、大ぶんきしよくがわるくなつた。是たからおれがのるまいといつた。こぶきしよくがわるく(廿九ノ三十ウ)なつちやア、只は済ねい。そしてせつかくよつておもしろいに、ゑいがさめてせつなくなつた。是じやアすまねい。酒手をくれる。もう一つへんよい直す、といへど、かごかきかまはすいそいで行。かごの中から、是へどふする(三十一終才)のた。だんへ宿も近くなる、ぼうくみとそうだんして、よいよふに酒手をくりやれ。じよさいはあるまい、といへとも、かごかきあいさつせず。中よりは、だんへ酒手へとせがむ。かごかき本しやうを見てとり、すくにかけおち。(三十一終ウ)此はなし古くは婦せ

板元へ門松竹の

音のあるうち

寛政三辛亥のとし

江戸本老三目

清水治兵衛板